

令和 4 年 6 月 22 日現在

機関番号：15501
 研究種目：基盤研究(C)（一般）
 研究期間：2018～2021
 課題番号：18K00188
 研究課題名（和文）日本と韓国における国際美術展のグランド・ツアー・インパクトをめぐる基礎的研究

研究課題名（英文）Preliminary Research on the Impact of the Grand Tour of the Contemporary Art Exhibitions in the Japanese and Korean Art World

研究代表者
 藤川 哲（Fujikawa, Satoshi）
 山口大学・人文学部・教授

研究者番号：50346540
 交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,600,000円

研究成果の概要（和文）：この研究では、現代美術の「グランド・ツアー」をめぐる諸問題を整理することを目指した。1997年、3つの大型国際美術展の開催が重なった。2007年と17年には「グランド・ツアー」と称する情報サイトが開設され、多くの美術関係者がこれらの美術展を巡った。「グランド・ツアー」体験者をリスト化し、経験の意味について議論する。手始めに日本と韓国とを対象とした。新型コロナウイルスによってヴェネツィア・ビエンナーレの開催周期が変わり、日韓の関係者によるシンポジウムも実現できなかったが、関係資料の収集と分析は進んだ。2027年に4回目の「グランド・ツアー」が実現するか不透明だが、研究テーマとして重要性には変わりはない。

研究成果の学術的意義や社会的意義

グランド・ツアーは、本来、17-18世紀にイギリスの若い貴族たちが行ったヨーロッパ大陸旅行を指す。しかし21世紀初頭、イタリアとドイツの2都市で開催される3つの大型国際現代美術展を巡る旅を新たに「グランド・ツアー」と称するようになった。世界中のアーティストや美術関係者、学生などが体験しており、現代アートのグローバル化を考察する上で重要なテーマとなっている。アート・ツーリズムは日本でも社会現象化しており、里山をめぐる越後妻有アートトリエンナーレ、瀬戸内の島々をめぐる瀬戸内国際芸術祭などが注目を集めている。本研究成果の学術的意義は、こうした国内外の同時代的動向に関する知見を掘り下げた点にある。

研究成果の概要（英文）：This research aimed to sort the issues around the contemporary art "Grand Tour". In 1997, three large scale exhibitions held simultaneously: the Venice Biennale, Documenta, and the Sculpture Project in Muenster. In 2007 and 2017, the official information site "Grand Tour" had opened with their cooperation. Many art people traveled these venues. The impact of "Grand Tour" should be estimated. To list the people who traveled, gathering their voices, and discussing on the experiences and its meanings are to be done. To get started, this research focused on the Japanese and Korean travelers.

The COVID-19 changed the cycle of the Venice Biennale. Whether the fourth "Grand Tour" in 2027 will be held or not is indeterminate. The symposium on the "Grand Tour" by Japanese and Korean art people could not realize. But collecting and analyzing of the related documents had advanced. The importance of the "Grand Tour" of the Contemporary Art Exhibitions as a research theme is unwavering.

研究分野：現代美術史

キーワード：国際美術展 ヴェネツィア・ビエンナーレ ドクメンタ ミュンスター彫刻プロジェクト グランド・ツアー アート・ツーリズム

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

研究対象である国際美術展のグランド・ツアーは、1997年、2007年、2017年に、多くの美術関係者が行ったヴェネツィア・ビエンナーレ(イタリア、ヴェネツィア)、ドクメンタ(ドイツ、カッセル)、ミュンスター彫刻プロジェクト(ドイツ、ミュンスター)を巡る旅である。研究代表者は、1993年よりヴェネツィア・ビエンナーレを毎回調査し、会場写真の撮影や展覧会図録、会場配布物などの資料を収集していた。また、1997年、2007年、2017年の各展覧会についても十分な調査資料の蓄積はあったが、分析には着手できていなかった。他方、2018年の研究開始当初、10年周期で開催されるミュンスター彫刻プロジェクトを1977年の第1回より企画・監督しているカスパー・クーニヒ(1943年生まれ)が、次の2027年には84歳の高齢となっていることから、関係者が存命のうちに聞き取り調査を開始することが急務であると思われる。1990年代より、ビエンナーレ・スタイルの国際美術展の開催は非欧米圏へ広がり、参加するアーティストも、企画するキュレーターも、それを見る観客もグローバル化し、作品のテーマや表現においても文化多元主義が進展している。こうした背景を踏まえ、日韓の美術関係者を中心に、グランド・ツアーのインパクトについて議論するフォーラムを構築することが、この研究のねらいであった。

2. 研究の目的

過去3回の各グランド・ツアーの体験者をリストアップし、その体験について聞き取り、日韓のアーティストやキュレーター、美術記者が参加するシンポジウムを企画して、2027年のグランド・ツアーに向けて、非欧米圏のグランド・ツアー体験がいかなるものであったか、という視点で総括することを目指した。合わせて、ヴェネツィア・ビエンナーレ、ドクメンタ、ミュンスター彫刻プロジェクト等の国際美術展の企画コンセプトや展示作品のテーマ、表現手法が、グランド・ツアーの体験や紹介記事、批評等を通じて、日本や韓国のアート・シーンに及ぼした波及効果の事例を収集することを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 既存資料の整理と分析

1997年、2007年、2017年の各展覧会について、国内では『美術手帖』、『朝日新聞』、『読売新聞』等の美術雑誌と新聞、海外ではイタリアの『Flash Art International』、ドイツの『Kunstforum』等の美術雑誌のレビューのリスト化を行い、体験者リスト作成の足掛かりとした。特に『Kunstforum』の関連記事はOCRにより全文をテキストデータ化、ドイツ語から英語への機械翻訳により、内容理解と検索を可能にした。また、イ・ユンファ『グランド・アート・ツアー』(韓国語)のOCR読み込みも行い、韓国語から英語への機械翻訳により内容把握を行った。

(2) 文献や資料の追加

17-18世紀のグランド・ツアーに関する文献を渉猟し、国際美術展のグランド・ツアーとの異同について理解を深めた。

ネット検索により、グランド・ツアーの3大国際展に関するレビューや、ブログ記事等をPDF化して蓄積した。

国際美術展に関する研究書の追加購入や、『OBOE Journal』(On Biennials and Other Exhibitions, ビエンナーレと他の展覧会に関する研究誌, 2020年創刊, 電子ジャーナル, オープンアクセス)の通覧により、最新の研究動向の把握に努めた。

(3) 国際美術展の実地調査と関係者への意見聴取

2019年に開催されたヴェネツィア・ビエンナーレについて実地調査を行い(5月)、同年12月、日本館キュレーターと出品アーティストを山口に招いてトーク・セッションを開催し、企画趣旨等について聞き取り調査を行った(於: 山口情報芸術センター, スタジオC)。

(4) ヴェネツィア・ビエンナーレ図録序文の通時的分析

ヴェネツィア・ビエンナーレ財団の理事長パオロ・バラッタは、1999~2001年、2009~2019年の長期にわたって同職にあり、同展の図録序文に、グローバル化への対応について、その都度言及しているので、内容を整理し、論文にまとめた。

(5) 『アートはどこへ行く? 小倉正史著作選集』への「解題」寄稿

2020年3月に病没した美術批評家・小倉正史の著作選集編集委員会に参加し、「I 拡散するアートの現場」に再録された15件の新聞・雑誌記事の解題を担当した。小倉氏は、美術雑誌『ア

トリエ』の編集長として、ハラルド・ゼーマン、カスパー・クーニヒ、ジャン=ユベール・マルタンら国際展の動向を牽引したキュレーターの企画展等を、1990年代より精力的に紹介してきた美術評論家である。再録記事選定のために、関連記事に目を通し、テキスト・データを作成・校正する作業を通して、1990年代から2010年代にかけての現代アートの動向と絡めて国際展の変容を再確認できた。

4. 研究成果

この研究では、1997年、2007年、2017年に多くの美術関係者が行った国際美術展の「グランド・ツアー」について、そのインパクトを解明するため、資料の収集や問題の整理等、基礎的調査を行った。各グランド・ツアー体験者のリストアップは思うように進まず、また新型コロナウイルスの流行とも相まって、日韓のグランド・ツアー体験者によるシンポジウムも実現できなかった。問題は、研究時間の確保にあったと考える。研究期間を当初の2018年4月から2020年3月までの3年間から、2022年3月まで2年間延長したが、研究時間確保の問題を改善することはできなかった。

研究期間内に論文としてまとめることが出来た研究成果は、(1)に上げた論文1本(査読無し)のみである。「3. 研究の方法」の(4)に記した通り、ヴェネツィア・ビエンナーレ財団理事長のパオロ・バラッタの序文に着目して、同展がグローバル化にどのように向き合ってきたか、通時的に分析を行った。英文校正費を支出しネイティブチェックを行った。2007年の「グランド・ツアー」の際には、デヴィッド・クロフが理事長として序文を寄せているが、そこにはヴェネツィア・ビエンナーレの呼びかけで3大国際展とバーゼルのアート・フェアを含めた協働が実現し、「グランド・ツアー」の特設サイトが開設されたことが述べられていた(註1)。

その他、論文以外で、関連する研究成果として(a)~(g)の7件の雑誌記事、オンライン・ウェビナー、研究ノート等を付記する。

(a)は、あいちトリエンナーレ展実行委員会識者部会委員の立場から、同展企画の一部であった「表現の不自由展、その後」出品作に対する非難への対応をめくり、展示中止を余儀なくされた問題について、ヴェネツィア・ビエンナーレやドクメンタ、そして地域性の強いノマド型ビエンナーレ「マニフェスタ」を比較例として紹介しつつ考察した記事である。同展芸術監督の津田大介氏もまた、監督就任時の2017年、ヴェネツィア・ビエンナーレ、ドクメンタ、ミュンスター彫刻プロジェクトの3大国際美術展をめぐる「グランド・ツアー」を行って、同展の構想を練ったという点が、本研究テーマに接続している。

(b)は、ウェビナーのパネリストとして、コロナ禍で2020年に開催予定だった国内外の国際美術展の事例を紹介し(ヴェネツィア・ビエンナーレ建築展も含む)、コロナ以降の国際展に関して私見を述べたもの。

(c)は、多摩美術大学芸術学科の学生に向けて、ビエンナーレがグローバル化する直前の状況を「プレ・ビエンナーレ化現象」というキーワードで括り、概説したオンライン・レクチャー。

(d)が、海外および県外出張等が困難になった状況に鑑み、地元山口に目を向け、長門市三隅町出身の洋画家・香月泰男の代表作「シベリア・シリーズ」と、カーネギー・インターナショナルやサンパウロ・ビエンナーレ等の国際美術展への出品歴の関係を考察した研究ノートである。

(e)は、同じく香月泰男について、彼の著作の索引づくりを通して、芸術観を探る試みである。(d)、(e)合わせて、国立大学の地域貢献という視点から設定した研究課題で、現代アートの多文化主義化を探る本研究とは表裏の関係と位置づけられる。

(f)は、「3. 研究の方法」の(5)に経緯等を記した「解題」である。小倉氏の批評活動の中には、ヴェネツィア・ビエンナーレやドクメンタ等の国際展のレビュー記事が多数含まれており、「国境のない現代美術」や「西洋中心主義から離れて」といった、本研究と共通する問題設定が見られる。

(g)は、「3. 研究の方法」の(3)に記したトーク・セッションの報告記事である。同トーク・セッションは、本研究代表者が当代表を務めていた特定非営利活動法人山口現代芸術研究所(YICA)と任意団体Life & ear Clubの共催で開催された。掲載誌は、コロナ禍で活動休止していたLife & ear Club発行のもので、2022年春活動を再開し、2019年度事業の報告として掲載された。

以上、研究成果は断片的で、研究活動も断続的であるが、「グランド・ツアー」に関する調査とネットワークづくりは、科研費の研究期間終了後も継続していく所存である。

(1) FUJIKAWA Satoshi, 'The Art Biennial of Venice 1999-2019 and Biennialization: Historical Analysis of Catalog Forewords', 『山口大学哲学研究』第27巻(2020年3月26日)、1-16頁、査読無し。

(a) 藤川哲「日本型ドクメンタと歴史の鏡」、芸術批評誌『リア』第44号(2020年3月31日)、34-36頁。

(b) 「第2回 コロナ以降の国際展とは?」、藤川哲、ユン・マ、逢坂恵理子、モデレーター=植松由佳、文化庁アートプラットフォーム事業 連続ウェビナー コロナ以降の現代アートとそのエコロジー(2020年9月10日、オンラインライブ配信)

- (c) 藤川哲「プレ・ビエンナーレ化現象 1951-1979 多中心的な世界美術史に向けて」、多摩美術大学芸術学科 21 世紀文化論 (2020 年 10 月 10 日、オンラインライブ配信)
- (d) 藤川哲「研究ノート 香月泰男の シベリア・シリーズ と国際美術展」、『山口大学哲学研究』第 28 巻 (2021 年 3 月 26 日) 53-68 頁。
- (e) 藤川哲「研究ノート 香月泰男『画家のこぼれ』索引(1)」、『山口大学哲学研究』第 29 巻 (2022 年 3 月 28 日) 37-49 頁。
- (f) 藤川哲「初出・解題」(I 拡散するアートの場合)、『小倉正史著作選集 アートはどこへ行く?』、水声社 (2022 年 3 月 1 日) 265-268 頁。
- (g) 藤川哲「第 58 回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展日本館展示「Cosmo-Eggs 宇宙の卵」報告会」、『LIFE & EAT DESIGN』(2022 年 5 月 9 日) 3 頁。

註

1. Davide Croff, "Introduction", *Think with the Senses - Feel with The Mind, Art in The Present Tense: 52nd International Art Exhibition, La Biennale di Venezia* (Venezia: Marsilio, 2007): n.p.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 藤川哲	4. 巻 28
2. 論文標題 研究ノート 香月泰男の シベリア・シリーズ と国際美術展	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 山口大学哲学研究	6. 最初と最後の頁 53-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Fujikawa, Satoshi	4. 巻 27
2. 論文標題 The art biennial of Venice 1999 2019 and biennialization : Historical analysis of catalog forewords	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 The philosophical studies of Yamaguchi University	6. 最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------